

本研究は20世紀を代表するキリスト教神学者の一人であるパウル・ティリッヒ（1886-1965）の「宗教の根源への問い」をめぐる宗教哲学的思索を主題とし、とりわけ1920年代・30年代の宗教思想を解明することを目的とする。ティリッヒの宗教思想の背後にある一貫した問題意識と課題は、キリスト教のメッセージがもはや伝統的な表現形式において受け取ることができないということ、それゆえそれは現代的状況に相応しい新たな表現形式において語り直されねばならないということである。もっともこのような問題意識は20世紀の他の神学者たち（カール・バルトにせよ、ルドルフ・ブルトマンにせよ）にも共有されるものであり、実際に宗教（キリスト教）の側からその伝統と現代との間の分断された溝を埋める様々な試みがなされてきた。しかしそのような試みの中で、同時代においてティリッヒの立場がとりわけ際立っているのは、宗教の根源へと迫ろうとする宗教哲学的＝神学的な思索においてである。ティリッヒは神学者として単に伝統的な宗教的語りを繰り返すのではなく、そのような語りの根源、つまりそのような語りが生じてくるところの体験そのものへと遡求することによって、その宗教的体験（＝啓示の出来事）を宗教哲学的に究明し、そこから再びその「語り」を振り返ることでそれを有意味に語り直そうとする。宗教の成立根拠とその生成過程を問うところにティリッヒの宗教哲学的思索の特徴がある。宗教が「そこ」から生じるところの「もと」とは何か、それは人間の本質とどのように関係しているのか、この問題をティリッヒはどのように考えているか、これが本研究を導く根本的な関心である。

まず序論では、本研究の問題設定と研究史における位置づけがなされ、本研究が取り組む課題として次の二点が明確化される。（1）1920年代における「宗教の根源への問い」の主題化と啓示論。「宗教の根源への問い」をめぐる宗教哲学的思索は、1920年代に構築される「宗教哲学」とその宗教哲学的な基礎において議論された「啓示論」において主題化されている。それゆえ宗教の根源が究明される場としてティリッヒの啓示論を解明することが第一の課題である。啓示論の解明を通して、キリスト教的な世界解釈のための「神－世界－人間」という形而上学的枠組みや、神と人間（世界）との関係性における「啓示－信仰」という図式が整理され、ティリッヒの宗教思想の基礎的な解釈枠が提示されることが期待される。（2）体系形成とその基礎理論の移行・変化。1920年代という時代はティリッヒの体系形成の移行期（思惟の理論的枠組みの変化）と重なっており、ティリッヒ研究においては重要な時期とみなされてきた。1920年代の思想は、1925年を境に前半（1919-25）と後半（1925-）に区分され、前半においてはドイツ古典哲学と現象学の影響を受けた意味論（超越論哲学）が展開され、後半（本研究では1930年代前半までの展開を追跡する）においては哲学的人間学と実存哲学の影響を受けた存在論（存在論的人間学）が展開され、それぞれティリッヒの宗教思想の基礎理論として機能している。1920年代に生じるこの基礎理論の移行・変化を説明することが第二の課題である。以上から本研究は全体として相互に関連する二つの課題を有している。ティリッヒの啓示理解ははじめ意味論的な枠組みにおいて規定されたが、後に存在論的な枠組みにおいても（厳密に言えば存在論と神学との接点として）内容上、継続される。啓示論の解明は意味論から存在論へと跨るティリッヒの宗教思想の基本的構図を明らかにすることに寄与する。一つ目の課題の遂行を通して、つまり宗教の根源を啓示の問題として解明することによって、二つの基礎理論において事柄として共有されている「宗教的体験」の構造が見出され、その共通の場から二つの体系構想の基礎理論のそれぞれの有効性の検証が試みられる。本研究における二つの課題の遂行は、主に1919～1935年という限定された時期のティ

リッヒの思想を分析することにおいてなされる。本研究の特色として挙げられるのは、(既存の主要著作の研究を前提としつつも) これまで未公開であった講義録の分析を研究の中心にしているということである。講義は、ティリッヒ自身の新しい思索の実験場であり、その意味で完成された研究ではないが、他方でその自由で創造的な試みは多くの重要な成果を生み出した。ティリッヒの主要な研究成果はこのような場から形成されたのである。本研究では特に1925～27年になされた教義学講義(第2章～第4章)とアメリカ亡命後初期(1934/35)になされた人間学講義(第6章・第7章)が詳細に扱われる。

本論の各章の概要は以下の通りである。第1章ではまず1920年代前半のティリッヒの問題意識が把握され、宗教哲学の方法論的基礎(意味論)が解明される。ティリッヒの意味論的な宗教哲学は、近代以降の「世俗化」「深みの次元の喪失」に由来する「世俗の文化的な領域」と「宗教的な領域」との分裂・対立を背景とし、そのような宗教と文化の分裂状況を新しい宗教概念の導入によって克服することを目指したものである。彼は宗教を「無制約的なものの経験」として規定することによって、あらゆる文化的な行為の根底に宗教的な働きを見出すことを可能にし、宗教と文化の統一的関係を描こうとした。このことは「文化は宗教の表現形式であり、宗教は文化の内容である」と定式化される。このような理解の重要性は、ティリッヒが宗教と文化の区別は精神行為の対象の相違ではなく、精神の方向性(態度)の相違であるとした点、またそれによって「宗教(神)と文化(世界)」の「並列化」と「内在化」を拒絶することができた点に認められる。いずれにしてもこの章ではティリッヒが宗教と文化の分裂状況(世界性B)からその統一的な関係性(世界性A)への転換点として「啓示の出来事」を問題としていることが確認され、次章以降で詳細に扱われる啓示論全体の素描がなされる。第2章と第3章はともに「啓示=突破」(「啓示は無制約的なものの制約されたものへの突破である」というテーゼ)の分析にあてられる。しかし第2章と第3章は「突破」概念へのアプローチ方法が異なる。第2章では突破概念の「一般的考察」、つまり突破概念の諸相(由来・形成過程と射程・意図)の分析がなされる。また同時に裏のテーマとして、この突破概念に基づいて同時代の神学潮流上におけるティリッヒの位置付けを明確化することが試みられる。ここで使用されるアプローチの特徴は、1920年代の諸著作における突破概念の実際の使用例の分析することによって、「突破概念の意味の分類」(クレイトンの研究)をするというものである。しかし使用例の分類という方法は確かに概念を整理することはできるが、その概念のもつ意味を十分に明らかにすることはできないのではないか。第3章ではこの観点から突破概念への別のアプローチを試みている。それは「啓示」という語の本質に基づくアプローチである。「啓示」という概念は本来「覆いを取り去る」「隠れたものが明らかになる」という意味であり、この理解からティリッヒの突破概念を把握することが試みられる。このアプローチによってティリッヒの啓示理解には「覆いを取り去る」ということ(超自然的啓示=突破)と「覆い隠される」ということ(自然的啓示=凝固)の相互性における動的な生成過程が見出されるということが解明される。このことによって第2章でなされた分析の理論的根拠が示されることになる。第4章では、第3章までが啓示の出来事(=突破)に焦点があったのに対して、「啓示の出来事」とその「語り」の関係性に注意が向けられる。ティリッヒにとって形而上学とは「無制約的なものを志向し、それを象徴によって表現しようとする宗教的営み」である。この章では「神について語ること」の困難と可能性が主題化され、神についての「間接的語り(=象徴)」とその語り(ドグマ)の共同体形成的機能が論じられる。最終的に「啓示の出来事」と「その語り」についてのこれまでの議論(第2章～4章)は、「体験・表現・了解」という「経験と言語表現」についてのより普遍的な構造連関(この点について八木誠一と上田閑照の宗教哲学が参照される)において整理され、ティリッヒの形而上学思想のもつ意義が宗教哲学的な文脈において評価される。第5章は本研究の主題にとって重要な章である。ティリッヒは『教義学講義』のあ

る箇所「啓示＝突破」概念を二つのレベルに分けている。それは根本啓示と救済啓示である。もっとも両者は抽象的な区別にすぎず、現実において両者は一つであるとされる。ティリッヒによると根本啓示は「無制約的なものが端的に突破すること」であり、救済啓示はそれに対して「無制約的なものが特定の道において突破すること」である。ここでの区別は「特定の道」つまり「具体的内容」（語り）の有無である。つまりティリッヒは突破それ自体、つまり「突破の瞬間」については「内容に関して無差別である」としている。それゆえ根本啓示こそがあらゆる具体的な啓示の始まり（＝宗教の根源）を示しているということである。この章では（シュスラーの研究に依拠しつつ）根本啓示の概念を探究することにおいて、ティリッヒの宗教思想において一貫して現れる二重構造（自己/世界、非象徴的な直接的把握/象徴的な間接的把握、確実性/懐疑）（根本啓示/救済啓示→絶対的信仰/具体的信仰→神を超える神/象徴表現としての神）、並びに徹底的な実存的懐疑（否定性）において転換として生じる宗教性（肯定性）が解明され、最終的に、徹底した懐疑が宗教の否定ではなく、逆説的に啓示の突破（＝宗教の誕生の瞬間）へと通じるというティリッヒの特徴的な思想が明らかとなる。第6章と第7章では、啓示の出来事についての「語りの内容（語られたもの）」の解明（キリスト教的象徴の解釈学）が試みられ、そのために中期ティリッヒの人間存在論の構想（『亡命初期講義』）の読解がなされる。ティリッヒは人間の有限性の分析（不安と絶望）によってキリスト教の教理の解釈を行っており、「異質性」、「不確実性（気がかり）」、「死の必然性（憂鬱）」という人間の不安（偶然性）や「全体性からの分離」という人間の絶望（罪）を、キリスト教の基本的な教理である「創造」「摂理」「永遠性」「救済」という象徴概念と対応させている。この場合、キリスト教信仰とその内容は人間の不安や絶望（実存的問い）を乗り越えようとする勇気の表現（答え）として捉えられる。この最後の二つの章を通じて、ティリッヒのキリスト教教理の解釈方法（問いと答えの「相関の方法」）とそれを支える理論的基礎（存在論的人間学）が解明され、亡命初期の体系構想の全体像（普遍的人間学→神学的人間学→キリスト教的教理の解明）が明らかとなる。ティリッヒは人間論の全体を人間の自由を扱う普遍的人間学（哲学的人間学）と人間の有限性を扱う神学的人間学の二段構成として構想しており、それらはいわば人間存在の肯定面（本質）と否定面（実存）を扱うものだが、この内の後者（有限性の教理）の議論から人間の実存的問いが仕上げられ、最終的にキリスト教の教理（象徴）がその問いへの答えとして解明される。

以上から導かれる結論は（二つの課題に対応して）次の二点にまとめられる。（1）宗教の成立根拠と生成過程の究明として、啓示の出来事の構造連関（体験・表現・了解）を「構造的・形式的な側面」（第2章～第4章の成果）と「内容的な側面」（第6章・第7章の成果）という相互に補完し合う観点から考察した点において、1920年代・30年代のティリッヒの宗教哲学的思索を評価することができる。「啓示＝突破」は、懐疑者から信仰者への転換の構造を示している（第5章の成果）と言えるが、（転換以前の）「懐疑者（問うもの）の実存的究明」という方向性と（転換後の）「信仰者（答えを受けたもの）の経験の反省的自己理解（回顧）＝神学」という方向性は、信仰へと至った一人の実存の探究者の歩みの全体を示すものである。ティリッヒは「宗教の根源への問い」において、宗教の生成現場を「生の意味を真剣に問う懐疑者」に見出し、その構造を「啓示＝突破」の出来事における「揺り動かし→方向転換」として規定した。その構造は、存在論的な問題設定において「存在論的衝撃→非存在（無）への不安→その根拠としての実存の絶望的状况→存在への勇気→伝統的な象徴の意味解釈（新たな表現の創造）」として内容的に補完される仕方で深められた。（2）（a）意味論から存在論への展開は、その思想の展開を読み解く基準を「方法」にではなく、その方法によって解明される「事柄」に置かならば、意味行為の主体としての「精神」の立場に基づく「宗教と文化」の問題系から人間存在（実存）の立場に基づく「人間存在論と神学」の問題系への展開として考えることができる。そしてその場合、「宗教」

の二重の弁証、つまり広義の宗教（＝「人間精神の深みの次元としての宗教」）と狭義の宗教（＝具体的歴史的宗教としてのキリスト教）の弁証が遂行されている。前者は、有意味な文化行為（世界形成）の背後に無制約的な意味への隠れた信仰を見出すことによって、人間精神における宗教性を明らかにしており、後者は、人間を「自らの存在の意味を問う存在者」として探究することによって、キリスト教信仰の内容を人間存在の実存的問いへの答えとして明らかにしている。前者についての議論は主に『宗教哲学』（1925）においてなされ、後者についての議論は『教義学講義』（1925-27）において主題化され、その方法論的な確立が『亡命初期講義』（1934-35）においてなされた。（b）意味論と存在論は体系構成が並行的に重なる。意味論の二つのヴァージョン（肯定面と否定面＝世界性Aと世界性B）は、人間存在論における普遍的人間学（自由論）と神学的人間学（有限論）に対応している。両者の肯定面について、意味遂行としての文化行為（意味論）は人間の自由による世界構築（普遍的人間学）と並行関係にあり、両者の否定面について、無意味性の深淵への沈み込み（意味論）は人間の有限性における不安と絶望（神学的人間学）と並行関係にある。さらにティリッヒはこの意味論と存在論の否定面を義認論（懐疑者）の考察によって深めている。